

言葉の豊かな幼児をめざして

— 聞く、話す楽しさを味わうようになるための環境構成と援助の工夫 —

豊見城村立伊良波幼稚園教諭 上 原 則 子

目 次

I	テーマ設定の理由	1
II	研究仮説	1
III	研究の全体構想図	2
IV	研究内容	3
1	豊かな言葉	3
(1)	言葉の豊かな幼児像	3
(2)	言葉を育てる上で大切なこと	3
(3)	幼稚園における言葉の指導	3
(4)	聞く話す力を育てるための援助の工夫	3
2	豊かな言語生活と環境構成	4
(1)	言葉を豊かにする環境	4
(2)	環境構成と援助の工夫	4
3	絵本について	5
(1)	幼児の発達と絵本	5
(2)	絵本とは	5
V	保育実践	6
1	実践事例1「がらがらどんごっこ」	6
2	実践事例2「てぶくろあそび」	7
3	実践記録「幼児の言葉の発達する姿と援助」	9
VI	研究の成果と今後の課題	10
1	成果	10
2	今後の課題	10

言葉の豊かな幼児をめざして

— 聞く、話す楽しさを味わうようになるための環境構成と援助の工夫 —

豊見城村立伊良波幼稚園教諭 上 原 則 子

I テーマ設定の理由

「三つ子の魂、百まで」の諺のように、幼児期は人間形成に必要な基礎が培われていく大切な時期であると言われている。この時期に幼児が自分の思いを素直な気持ちで感情をこめた言葉で表現することは、将来、よりよく生きていくために大切なことである。幼稚園教育要領の教育の目標（４）に「日常生活の中で言葉への興味や関心を育て、喜んで話したり聞いたりする態度や言葉に対する感覚を養うようにすること」と示されている。このことから、人の話を聞いたり自分で話したりする生活は、幼児期の重要な発達課題であることがわかる。また、幼児の認識や思考は言葉を用いることで進められ、思考力は豊かな言語環境の中でその素地が培われる。

私の学級の実態をみると自分の考えや思いが表現できず、すぐ乱暴な態度をとって喧嘩やトラブルを起こしたりするなどの直接的行動に出る子が多く見られた。これは語彙の貧しさも一つの原因である。これまでに「言葉の豊かな子」を育てるために、私は絵本の読み聞かせや、言葉遊び等を中心に保育を進めてきた。ところがそれだけでは、聞く、話す楽しさが十分伝わったかどうかは疑問が残る。それは幼児と教師の信頼関係の弱さや、絵本や物語等の精選や読み方に工夫が足りなかった等が原因である。絵本や物語に親しむことによって、自分の経験と結び付けたり想像をめぐらしたりするなどの、経験の積み重ねが幼児の想像力を豊かにし言葉の感覚も育つものと考えられる。

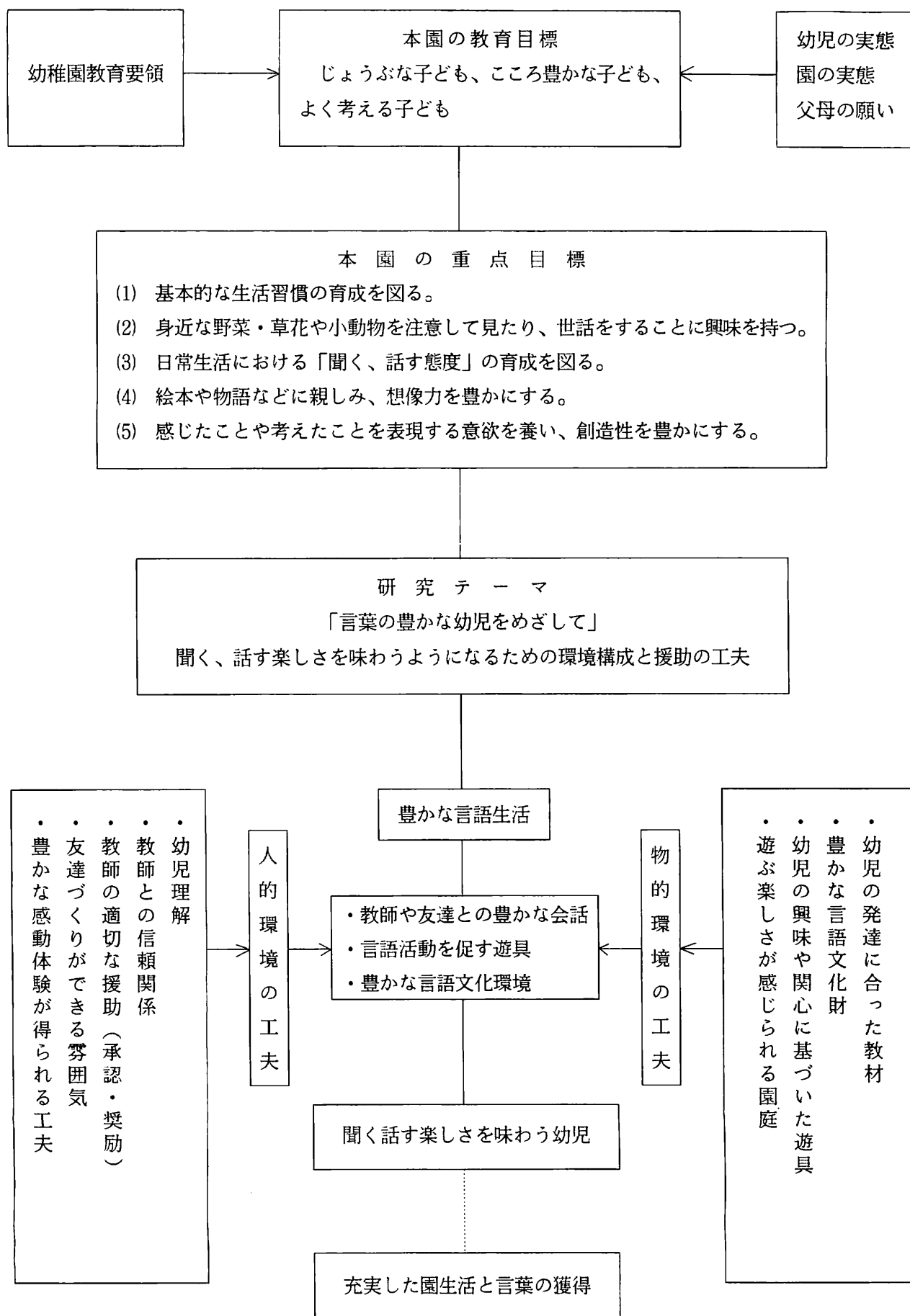
幼児が言葉を通して、意欲的に自己を表現し、相手の話を聞く楽しみを味わいつつ、言葉を発達させるためには、コミュニケーションの成立が不可欠である。また、幼児は生活の中で心を動かし、その感動に出会うと、自分の思いや感動を表現することにより伝え合う喜びを味わうことができる。従って、幼児の言葉の発達には、豊かな生活の中でこそ可能である。そのためには魅力的で幼児の関心をひく事物があること、伸び伸びと言葉を交わしあえる雰囲気があること、感動や要求を伝える相手がいること、共感しあえる友達や教師の存在が必要である。

以上のことをふまえて、私は人間形成の基礎を築く幼稚園生活において、幼児に絵本や物語などに豊富に触れさせることにより、自分の考えや思いをことばでより確かにしたり、友達や身近な人々との豊かな生活の中で、言葉のやりとりを楽しませることを通して、幼児が聞く、話す楽しさを味わうようになることを願い本テーマを設定した。

II 研究仮説

- 1 豊かな園生活において、教師が幼児一人一人の話をじっくり聞いてあげることにより、幼児は心を開き、喜んで話すようになるであろう。
- 2 絵本や物語などに豊富にふれることにより、想像力が豊かになり聞く、話す楽しさが味えるであろう。

Ⅲ 研究の全体構想図



IV 研究内容

1 豊かな言葉

言葉を育てるためには、言葉そのものを見つめ、その育ちを考えられる教師の力が必要である。同時に言葉の表現の背景にも目を向けていかななくてはならない。形の整った美しい言葉で表現できても、表現したくなるような感情の動きがないと、望ましい幼児の言語表現とはいえない。教師は幼児が生活の中で、思わず伝えたいくなるような物や出来事との出会いを発見できるように援助する必要がある。また教師も生活の中の出来事を豊かに言葉で表現し、子どもと共感することで、言葉の豊かな幼児が育つと考えられる。

(1) 言葉の豊かな幼児像

- ① 感情が豊かで表現力のある子 ② 感じたことを素直に表現する子 ③ 想像力がある子
- ④ 語彙が豊富な子 ⑤ 伝え合う喜びを味わう子

(2) 言葉を育てる上で大切なこと

幼児は、自分の見たこと、聞いたこと、思ったこと、考えたことを誰かに伝えたいという欲求をもっている。その場合、新しい発見や感動体験がともなっていることが多い。「聞いてもらいたい」「認めてもらいたい」気持ちを受け止め尊重し、話しやすい雰囲気をつくることが大切である。また幼児が言葉で表現しようとする意欲や表現力を育てるために、次のような援助が考えられる。

- ① 幼稚園においては、生活の中で心を動かし表現したくなるような体験が豊富にできるような援助をすること。
- ② 言葉を交わす喜びを味わえるような友だちや教師の存在があること。
- ③ 話したり聞いたりする経験を十分もたせること。
- ④ 絵本や物語に親しむ機会を多くもたせること。
- ⑤ 幼児一人一人の言葉の育ちを把握すること。

(3) 幼稚園における言葉の指導

言葉は幼児期に著しい発達をする。幼児期における言語生活は、話し言葉が中心であり、6歳くらいまでに生活に必要な言葉を一応体得する。言葉の発達は、社会性、情緒、知的発達を促すうえに重要な役割を果たし、また同時にそれらの発達とともに身体的発達とかかわりながら言葉は発達する。幼稚園教育の特質から見ると、言葉の指導は生活の中で様々な機会をとらえて指導する。

① 聞くこと

子どもは、身の回りにいる人の言葉や話を聞いて言葉を覚える。人の話を聞くことは人の心を理解することである。「聞く」という活動をどうとらえるか、その受け止め方は様々である。そこで幼児の発達に即し、ねらいや内容に応じた指導と援助が必要である。

② 話すこと

話すことは、自己の心の表出であり表現である。人間関係が生活の中で広がるきっかけは言葉であり、自己表現をしながら幼児なりに考えをまとめていく。話すことの前提には聞くことがある。幼児の場合は、共感が言語発達の基盤になる。幼児と教師の心のつながりや、安定した情緒をもつことによって「聞きたい」「話したい」という意欲が育つ。

(4) 聞く話す力を育てるための援助の工夫

- ① 生活の中で心を動かし、表現したくなるような体験をもたせる。
- ② 言葉を交わす喜びを味わわせ、話したり聞いたりする経験を十分に持たせる。
- ③ 幼児の話す言葉に興味関心をもち、親しみをもって聞く。
- ④ 幼児の気持ちを受け止め、幼児がゆったりした気持ちで話せるようにする。
- ⑤ 教師の使う言葉は幼児に影響を及ぼすので、日常生活の言葉を大切にする。
- ⑥ 教師は幼児に対する話しの内容やその方法を工夫する。
- ⑦ 絵本や物語など言語文化とのかかわりのもてる環境を構成する。

2 豊かな言語生活と環境構成

(1) 言葉を豊かにする環境

- ① 幼児が心を動かし表現したくなるような、感動体験が豊富にもてる環境
- ② 幼児の興味や関心に基づいた遊具があること。
- ③ 幼児の発達に合った教材・教具がある環境。
- ④ 言葉をかわす楽しさが味わえる友達や教師の存在。
- ⑤ 絵本や物語などの言語文化財が豊富にある環境。
- ⑥ 幼児の思いをまるごと受け止め、励まし援助する教師の存在。
- ⑦ 幼児のよりよい言語発達を促す教師の磨かれた言葉。

(2) 環境構成と援助の工夫

- ① 幼児興味、関心のあるもの、遊びたくなるような環境づくりをする。
- ② 幼児の生活の流れに応じて、教師と幼児と一緒に環境をつくっていくようにする。

<絵本コーナー>

幼児は絵本を見たり読んだりして、絵本の内容に共感し、登場人物になりきって、現実では味わえない想像の世界を豊かに広げていく。幼児一人一人が自分で好きな絵本を選び、自分のペースで絵本に触れ絵本と対話を行なっていく。そういう時期にすばらしい絵本との出会いの場を設けることは、言葉の獲得を促すのに大切な環境の一つである。そのような考えのもとに幼児の興味や関心、欲求、発達、遊びの流れ、季節感などをふまえ絵本コーナーを、下記のように設定する。

- ① 保育室の一角に、静かに絵本を見ることのできる独立した雰囲気のある場を設定する。
- ② 他のコーナーとのしきりに、絵本棚やカラーボックスを置く。
- ③ ゆったりした家庭的な雰囲気のなかで、絵本にひたれるように環境を工夫する。
- ④ 椅子に腰掛けて絵本を見たい時のために、丸型テーブル、四角型テーブルを準備する。またその上にテーブルセンターをかけ花を飾ったりして楽しい雰囲気をかもし出す。
- ⑤ 幼児の発達と興味を考慮し、絵本を選択し配列する。

教師の援助

誰がどのような本を見ているか、どのような見方をしているか、心の動き、反応などを観察する。また幼児をいつも温かく見守り、教師に受け入れられている安心感をもたせる。それと同時に必要に応じて、いっしょにうなずき感動を分かち合えるような、言葉の援助も必要である。

<ままごとコーナー>

ごっこ遊びは幼児が自分の経験したことや見たことを、遊びの中で模倣し再構成していく。身近に接してきた人になりきったり、身近な事象など自分の感じていること、思っていることを自由に表現できる。このコーナーでは、ままごとやレストランごっこを楽しむことができる。幼児はエブロンを身につけるだけで、おかあさんの役になりきり、想像をめぐらして豊かな会話を楽しんだりする。このことからごっこ遊びは、イメージを広げたり言葉を豊かにするために大切な遊びである。場の設定としては、ごっこ遊びが楽しめるような家庭的な雰囲気を作ることである。ままごと道具、種類別に標示し幼児が遊びやすく片付けやすいようにする。ごちそうの材料は幼児といっしょに画用紙等で必要に応じて作るようにする。

* コーナーに必要な教材

ままごと道具・教材棚（折り紙・画用紙・セロハンテープ等）空き箱（牛乳パック・菓子類の空き箱アイスクリーム、ラーメンなどのパック類等）

教師の援助

- ① 幼児一人一人の思いを大切に受け入れながら、友達や教師との信頼関係を深めイメージを広げ育ちのようすを理解する。また遊びのなかで必要な言葉が使えるように配慮する。
- ② 自分の気持ちを相手にわかるように、話すことに気づかせる。
- ③ トラブルが起きた時には、なるべく自分達で解決できるように見守ったり、必要に応じて援助していく。

3 絵本について

(1) 幼児の発達と絵本

幼児期は人間形成の上で大切な時期である。この時期は、身体的な基礎が出来上がり、情緒面や社会性の人格形成の基礎も確立し、また好奇心や探求心といった知的面も急速に発達する。また、幼児期は、幼児が話し言葉の生活を始め、充実させていく時期である。幼児は毎日の生活の中で、人との積極的なかわりを通して、言葉を獲得していく。絵本は、現実の時間や空間を越え、想像の世界へ幼児を誘う。それは、間接的な体験ではあるが、自由に思い浮かべ、さまざまな感動を味わい、独自の思いを巡らせることができる活動ともなる。そのことから絵本に親しむことは、想像力が急速に伸びる幼児期にふさわしい体験となり、幼児の言葉の動きをおおいに刺激することになる。

(2) 絵本とは

絵本は子どもが最初に出会う本である。絵と短い文章によって話が進められていて、大人に読んでもらってもよいし、自分でも開いて見ることもできる。生活の中に絵本を取り入れることで、想像力が豊かになり、言葉に対する感覚も育つ。絵本は、子どもに絵やストーリーを通して、ものの見方・考え方や、美しさとは何かを問いかける文化財である。

① 絵本の読み聞かせの意義

- ・イメージの世界を広げ間接的にいろいろな未知の世界が体験できる。
- ・語彙が増えて、言葉の表現が豊かになり、言葉に対する認識を確かなものにしていく。
- ・経験を再認識することによって知識や理解を深める。
- ・知的好奇心や科学性の芽生えを育てる。
- ・情緒の安定をはかり、豊かな心情・豊かな人間性を養う。
- ・ことばのイメージを豊かに育て、さまざまな言葉に触れたり、話のおもしろさを味わったりすることができる。
- ・絵本を見て、自分の思ったことや感じたことを表現していこうとする意欲や態度が育つ。
- ・友達や教師と一緒に絵本を楽しんだりすることを通して、読み手と聞き手が物語の世界を共有する。そのことが、人間関係を結んでいくきっかけをつくる。
- ・自分の知っている世界を広げ、身近な環境に対する興味や関心を深める。
- ・繰り返し読んでもらうことにより、内容を味わうことができる。
- ・一方通行的なテレビを主体とした視聴覚マスメディアの氾濫している今日、読み手の生の声で行われる読み聞かせの意義は大きい。

② 読み聞かせをする時の留意点

- ・読み手が絵本の内容を十分把握し、消化して、絵本を見る楽しみを子どもたちと分かち合う気持ちで読む。
- ・句読点に従って間を取ったり、読みの流れにリズムをもたせるように読む。
- ・絵本には1ページのなかに子どもの期待がたくさん詰まっている。従って、ページを開く時は、間の取り方を工夫し子どもの関心を高められるようにする。
- ・読み聞かせの後は感動を大切に、イメージを妨げるような説明はさける。

③ よい絵本の条件

絵本を選ぶ時は、幼児と教師がいっしょになって、共にわくわくしながら選択し、共に感動を味わい、より興味・関心をもたせるようにする。よい絵本の条件については、下記の通りである。

- ・絵と文がよく合っていて、想像しやすいこと。
- ・幼児の発達に応じて分かりやすく、幼児の興味をひくもので、繰り返しがある。
- ・絵の色彩は、単純明瞭でバランスがとれたものであること。
- ・文章は、それだけを読んでも豊かなイメージがわいてくるような、すぐれたものであること。
- ・物語絵本は絵自体にストーリーの発展があり、絵は人物や動物など表情が豊かなものである。
- ・知識絵本は写真や図鑑のように、事物をリアルに描かれた物がよい。

V 保育実践

1 実践事例1「がらがらどんごっこ」 7月

(1) 活動の設定理由

友達との関係が安定し、気の合った友達との遊びの中で安心感を味わうようになってきている。この時期にさらに友達関係を広げ、自分の考えを相手に伝え、言葉のやりとりを楽しませたいと考えた。

<ねらい>

- ・自分のイメージを言葉や身体で表現し、聞いたり話したりしながら言葉のやり取りの楽しさを味わう。
- ・友だちと絵本のイメージを共有しながら、仲良く遊ぶ。

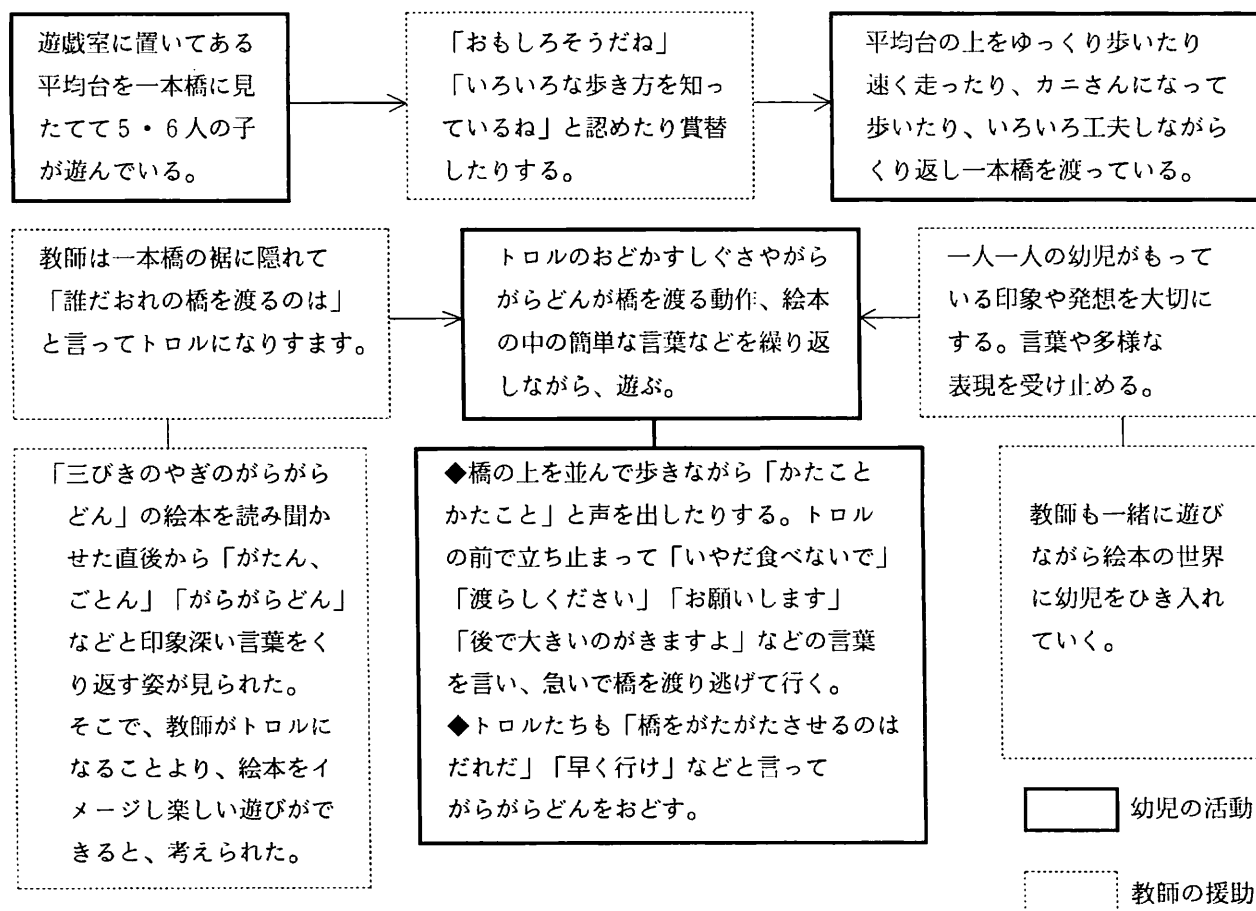
<内容>

- ・自分のしたいことや考えたことを言葉で伝える。
- ・絵本に出てくる好きな登場人物になって、簡単な繰り返しの言葉や動作をまねて楽しむ。
- ・友だちと言葉のやりとりを楽しむ。

<環境構成>

- ・それぞれのイメージが互いに伝わるように、働きかける。
- ・教師もいっしょに体を動かし遊ぶなかで、幼児一人一人の話に耳を傾け、認め賞賛する。
- ・幼児のイメージづくりのたすけになるような教材の準備をする。

(2) 幼児の活動する姿と教師の援助



(3) 考察

- ・幼児の思いが聞く話す楽しさにつなげるように、幼児理解の大切さがわかった。
- ・教師が「誰だおれの橋をわたるのは」と言葉かけをしただけで、幼児は三びきのやぎのがらがらどんの世界へ入っていった。それは読み聞かせによって共通のイメージがあったからだと思う。
- ・絵本のイメージを言葉や体で表現しながら、何回も繰り返し楽しむ中で、適切な言葉やリズムカルな言葉に気づき、言語の表現力が豊かになったと考える。

2 実践事例2 「てぶくろあそび」

(1) 指導案

＜活動名＞「劇遊びをしよう」絵本「てぶくろ」から

＜ねらい＞友達といっしょに想像する喜びや、聞く話す楽しさを味わう。

＜内容＞① 絵本に親しみ、想像しながら見る。

② 劇あそびを通して、友だちといっしょに言葉のキャッチボールを楽しむ。

＜活動設定の理由＞

絵本に親しみ、興味を持って見たり、聞いたり、想像したりすることによって、友だちと一緒に感動を共有することができる。更に絵本は子供の言葉のイメージを豊かに育て、さまざまな言葉に触れ、お話しのおもしろさを味わったり、自分の思ったことや感じたことを表現していこうとする意欲や態度を育てたりするのに、たいへん有効な素材である。また、自分の知っている世界をさらに広げていったり、身の回りの環境に対する興味や関心を深めたりすることもできる。

絵本「てぶくろ」には、ねずみ、かえる、うさぎ、きつね、おおかみ、いのしし、くまが次々に登場する。幼児は、動物たちが出てくる物語に興味を示す。おじいさんが落としていったてぶくろに動物たちが暮らす発想がおもしろいところである。

そこで、幼児一人一人の思いや発想を認めながら、読み聞かせを進めていきたい。そして「てぶくろ遊び」を楽しみたい。

12月17日(火) さくら組 33名 10時～10時40分	
幼児の活動の流れ	教師の援助
絵本「てぶくろ」の読み聞かせ ★次はどんな動物がでてくるかな。 ★動物たちとのやりとりにすすんで参加する。 ★おじいさんがてぶくろを拾ったうれしさを言葉で言う。 ★余韻を楽しむ。	☆教師はクラス全員がよく見える位置に立つ。 ☆幼児の反応を見ながら声の抑揚、強弱に気をつけながら読み進めていく。 ☆ページを開く時は、間の取り方を工夫して幼児の関心が高められるようにする。 ☆場面に応じて、一緒に読んだり発問したりする。 ☆幼児の言葉やつぶやきを心にとめるようにする。 ☆「くいしんぼうねずみ」「ぴよんぴよんかえる」等の言葉のリズムを感じ取ってほしい。
てぶくろの劇あそび ★なりたい役を前日までに決めておく。 ★お面は画用紙を使って、前もって作っておく。 ★お面を付けて所定の場所で待つ。 ★動物たちの言葉のキャッチボールを楽しむ。	☆小道具の準備は前日に点検しておく。 ☆おじいさんや動物たちはどんな表情や表現をして、出てきたら良いか問いかける。 ☆動物たちのやり取りを楽しんでほしい。 ☆一人一人の表現を大切に受け止め、認めたり、励ましたりする。
それぞれの役になりきって遊ぶ	☆声が小さかったり、言葉がうまく出ない時は援助をする。

(2) 環境構成

動物たちの家

⑥
⑤
④

③
②
①

* 床にビニールテープで「てぶくろ」を描く。
* おじいさんの衣装 * 動物たちのお面

黒板に表示

⑦	⑥	⑤	④	③	②	①
の	き	は	お	は	ぴ	く
っ	ば	い	し	や	ょ	い
そ	も	い	ゃ	あ	ん	し
り	ち	ろ	れ	し	ぴ	ん
ぐ	い	お	ぎ	う	ょ	ぼ
ま	の	お	つ	さ	ん	う
	し	か	ね	ぎ	が	ね
	し	み			え	ず
					る	み

いバ
るッ
動ク
物に
た幼
ち児
のが
絵描
をいた
貼る森
に住
んで

(3) 考察

- ① 読み聞かせでは、次はどんな動物が出てくるか想像しながら見ている様子であった。小さい動物から順次出てくるの気づいた幼児もいた。「わっ、雪降っている」「きばもちいのしだ、きばがある」などの会話も聞こえ、想像する楽しさや喜びが伝わってきた。
- ② 「てぶくろ」の読み聞かせでは、共通のイメージをもつことにより、教師と幼児との信頼関係が深まった。
- ③ 絵本から展開した劇遊びは友だちとの積極的なかわりも見られ楽しそうであった。また動物になって歩く姿にも工夫が見られ身体表現も伸び伸びと行なった。
- ④ 劇あそびでは、動物たちの言葉のキャチボールもたくさん見られ、聞く、話す楽しさを味わうことができた。
- ④ 言葉のおもしろさやリズムカルな言葉に興味を示し、生活の中に取り入れるようになった。
- ⑤ 友だちとイメージが共有できる楽しみが生まれ、遊びを変化させて楽しんだ。「ここにすんでいるのはだれ」「○○よ」「あなたはだあれ」「わたしも入れて」と友だち同士の会話の中でも絵本の登場人物の会話が多く使われるようになった。



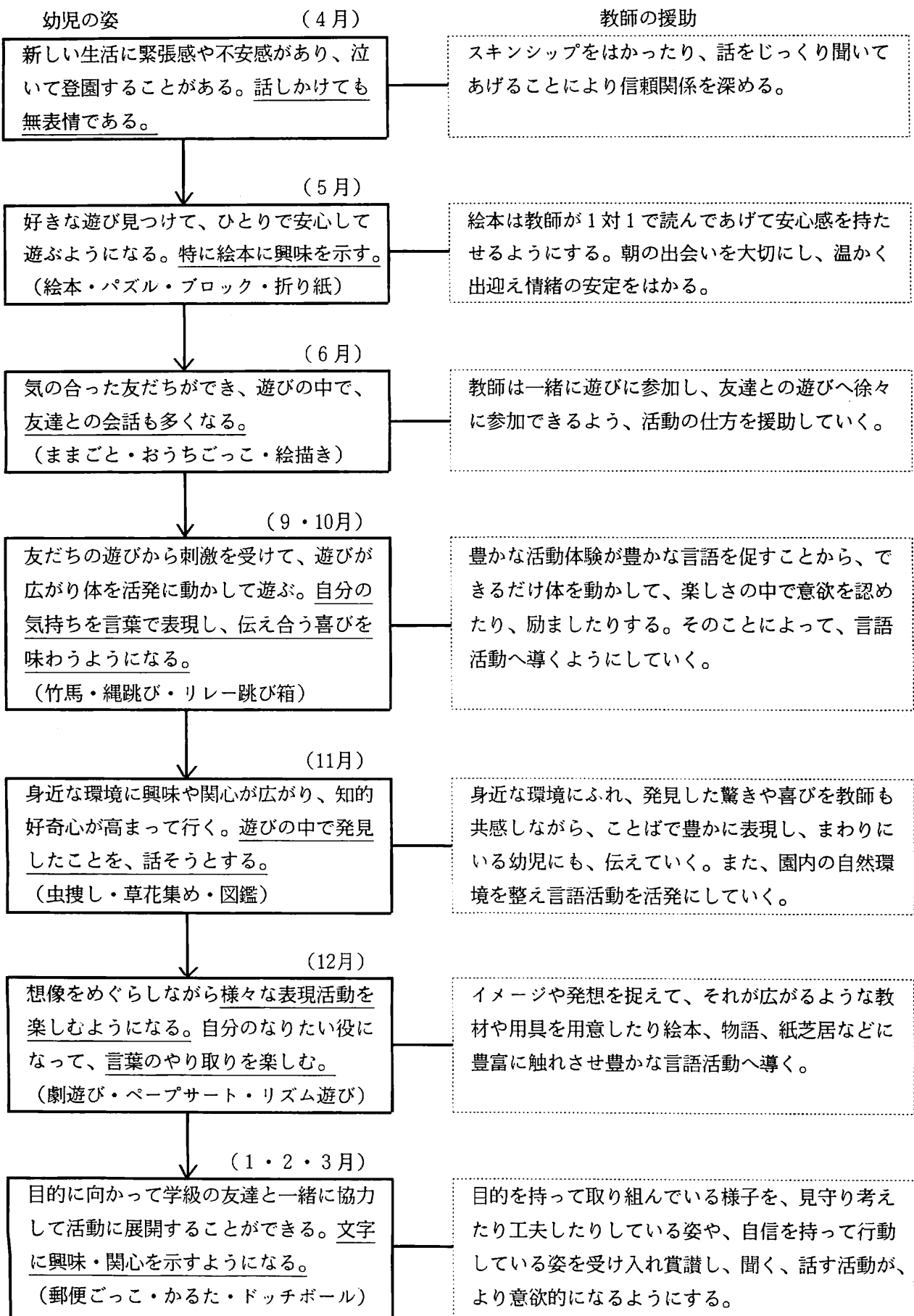
私たち、えほんが大好きです



げきあそびは楽しいな！

3 実践記録 「幼児の言葉の発達する姿と援助」

園生活の中で、適切な援助はどうあるべきかについて、A子の言葉の発達する姿を追って考える。



VI 研究の成果と今後の課題

1 成果

- (1) 絵本は子どもの言葉のイメージを豊かに育て、さまざまな言葉に触れ、話のおもしろさを味わったり、自分の思ったことや、感じたことを表現していこうとする意欲や態度を育てるのに、有効な素材であることがわかった。
- (2) 絵本の中で自分のイメージに合った言葉に出会ったとき、幼児たちは何度も繰り返してその言葉を楽しむようになる。このような繰り返しが、幼児の語彙を豊富にしたり表現を豊かにしたりすることにつながっていった。
- (3) 同じ本を友だちと一緒に見ることにより、イメージが共有でき、遊びが広がったり深まったり、伝え合う場面も見られ、集団で育つことの良さを認識することができた。
- (4) 幼稚園生活における豊かな生活が、豊かな言語活動を生み、それが媒介になって言語感覚も育ってくることが分かった。
- (5) 教師が幼児一人一人の話をじっくり聞いてあげることにより、信頼関係が深まり喜んで話すようになることがわかった。
- (6) 絵本の読み聞かせから発展した劇あそびの中で、幼児は登場人物になりきり創造的な会話や、豊かな言葉で聞く、話す楽しさにひたることができた。

2 今後の課題

- (1) 幼児理解のための保育記録の継続
- (2) 言葉を豊かにするための、年間計画の作成
- (3) 豊かな言葉を育てる教材研究
- (4) 幼児の言語を育てる環境づくりの工夫

<主な参考文献>

文部省	『幼稚園教育指導書増補版』	フーレベル館	1989年
岡田正章他監修	『話しことば・書きことば』	チャイルド社	1977年
阿部明子、編	『保育内容・言葉』	建帛社	1989年
村井潤一、編	『言葉』新・幼稚園教育要領	ひかりのくに	1990年
岸井勇雄 編	『言葉』	チャイルド社	1990年
河野重雄 編	『新しい幼稚園教育要領とその展開』	チャイルド社	1989年
岡田正章他監修	『絵本・童話』	チャイルド社	1977年